

二日物語

幸田露伴

青空文庫

此一日

其一

観見世間くわんけんせけん是滅法ぜめつぽふ、欲求無尽涅槃よくぐむじんねはん處しよ、怨親をんしん已作平等いさびやうどうしん心、
 世間せけん不行慾等事ふぎやうよくとうじ、隨依山林及樹下ずゐえさんりんきふじゆげ、或復塚間露地居わくぶくちようかんろちきよ、捨
やおいつさいしようゐ於一切諸有為たいくわんしんによこつじきくわつ、諦觀真如乞食活たいくわんしんによこつじきくわつ、南無阿弥陀仏、南無
 阿弥陀仏。實げに往時いにしへはおろかなりけり。つく／＼静かに思惟しゆゐ
 すれば、我憲のりきよ清と呼ばれし頃は、力を文武の道に勞つからし命を寵
 辱ちまたの岐に懸け、密ひそかに自ら我をば負たのみ、老病死苦の免ゆるさぬ身をも

て貪瞋痴毒の業をつくり、私邸に起臥しては朝暮衣食の獄に繋がれ、禁庭に出入しては年月名利の坑に墜ち、小川の水の流るゝ如くに妄想の漣波絶ゆる間なく、枯野の萱の燃ゆるやうに煩惱の火 自ら楽むに、有がたや三世諸仏のおぼしめしにも叶ひしか、凡念日に薄ぎて中懐淡きこと水を湛へたるに同じく、罪障刻に銷して両肩軽きこと風を担ふが如くになりしを覚ゆ。おもへば往事は皆非なり、今はた更に何をか求めん。奢を恣まにせば熊掌の炙りものも食ふに美味ならじ、足るに任すれば鳥足の繕したるも纏ふに佳衣なり、ましてや蘿のからめる窓をも捨て、月我を吊ひ、松たてる軒に来つては風我に戯る、ゆかしき方もある住居なり、南無仏南無仏、あはれよき庵、あはれよ

き松。

久に経てわが後の世をとへよ松あとしのぶべき人も無き身ぞ

其二

真清水の世に出づべしともおもはねば見る眼寒げにすむ我を、
慰め顔の一つ松よ。汝は三さんとう冬にも其色を変へねば我も一ひとすぢ条に
此心に移さず。なむぢ嵐に揺いでは翠光を机上の黄くわうくわん巻まきに飛ば
せば、我また風に托して香烟を木末の幽花こずゑにたなびかす。そもノ
我と汝とは往時むかし如何なる契りありけむ、かく相互に睦ぶこと是

も他生の縁なるべし。草木国土しつかいじやうぶつ悉皆成仏と聞くときは猶行末も頼みあるに、我は汝を友とせん。菩提樹神のむかしは知らねど、腕を組み言葉を交へずとも、松心あらば汝も我を友と見よ。僧青松の蔭に睡れば松老僧の頂を摩す、僧と松とは相ふさは応しゝ。我は汝を捨つるなからん。

ん
此所をまた我すみ憂くてうかれなば松はひとりにならんとすら

あら、心も無く軒端のきばの松を寂さびしき庵の友として眺めしほどに、憶ひぞ出でし松山の、浪の景色はさもあらばあれ、世の潮しほなわ泡の

跡方なく成りまし玉ひし新院の御事胸に浮び来りて、あらぬさま
 にならせられにんなじ仁和寺の北の院におはしましける時、ひそかに参り
 て畏くも御髮落させられたる御姿を、なくくおぼろげながらに
 拝みたてまつりし其夜の月のいと明く、影もかはらで空に澄みた
 る情無かりし風情さへ、今まのあたり眼前に見ゆるがごとし。南無阿弥
 陀仏、南無阿弥陀仏。實にげ人界不定にんがいふぢやうのならひ、是非も無き御
 事とは申せ、想ひ奉るまつもいとかしこし。南無阿弥陀仏、南無阿弥
 陀仏、南無阿弥陀仏阿弥陀仏。おもへば不思議や、長寛二年の秋
 八月廿四日は果敢なくも志渡しどにて崩れさせ玉ひし日と承はれば、
 月こそかは異れ明日は恰も其日なり。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。
 いで御陵みさゞきのありと聞く白峯といふに明日は着き、御墓おんしるしの草

をもはらひ、心の及ばむほどの御手向けおんたむをもたてまつりて、いさゝか後世御安樂の御祈りをもつかまつるべきか。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

其三

頃は十月の末、ところは荒涼たる境なれば、見渡す限りの景色いともの淋しく、冬枯れ野辺を吹きすさむ風せうくと衣裾もすそにあたり、落葉は辿る径を埋めて踏む足ごとにかさこそと、小語さゝやくごとき声を発する中を然くぜんとして歩む西行。衆聖しゆじやうちゆうそん中尊ちゆうそん、世間せけん之し父しふ、一切衆生いっさいしゆじやう、皆是吾子かいぜごし、深着世樂しんぢやくせらく、無有慧心むうゑしん、などと

譬諭品の偈を口の中にふつくと唱へく、従ふ影を友として漸
 やく山にさしかり、次第くに分け登れば、力なき日はいつし
 か光り薄れて時雨空の雲の往来定めなく、後山晴るゝ歟と見れ
 ば前山忽まちに曇り、嵐に駆られ霧に遮へられて、九折なる岨を
 伝ひ、過ぎ来し方さへ失ふ頃、前途の路もおぼつかなきまで黒み
 わたれる森に入るに、椈柏の大樹は枝を交はし葉を重ねて、杖持
 てる我が手首をも青むるばかり茂り合ひ、梢に懸れる松蘿
 は 《さんく》として静かに垂れ、雨降るとしは無けれども空
 翠凝つて葉末より滴る露の冷やかに、衣の袖も立ち迷へる水気に
 湿りて濡れたるごとし。音にきゝたる児が岳とは今白雲に蝕まれ
 居る岨 《がゞ》と聳えし彼峯ならぬ、さては此あたりにこそ御

墓しるしはあるべけれど、ひそかに心を配る折しも、見るく千仞せんじん
 の谷底より霧漠と湧き上り、風に乱れて渦巻き立ち、崩るゝ雲
 と相応じて、忽ち大地に白布を引きはへたる如く立籠むれば、呼
 吸するさへに心ぐるしく、四方あたりを視るに霧の隔てゝ天地あめつちはたゞ
 白きのみ、我が足すらも定かに見えず。何と思ひも分け得ざる間
 に、雲霧自然おのづと消え行けば、岩角の苔、樹の姿、ありしに変わらで
 眼まなこに遮るものもなく、たゞ冬の日の暮れやすく彼方の峯はやいに既没り
 て、梟はばたきの羽翥し初め、空やゝ暗くなりしばかりなり。木立わづ
 かに間ひまある方の明るさをたよりて、御陵みさゞぎ尋ねまらする心のせわ
 しく、荆棘いばらを厭はでかつ進むに、そもくこれをば、清凉紫せいりやうし
 宸んの玉台に四海の君とかしづかれおはしませし我国の帝の御墓

ぞとは、かりそめにも申得たてまつらるべきや、わづかに土を盛り上げたるが上にそまつ麤末なる石を三重に畳みなしたるあり。それさへこと狐兔のこ踰ゆるに任せさうらい草葉の埋むるに任せたる事、勿体なしとも悲しとも、申すも畏し憚りありと、心も忽ち搔き暗まされて、夢ともうつつ現とも此処を何処とも今を何時とも分きがたくなり、御墓の前に平伏してひれふ円顱を地ゑんろに埋め、声も得立むせてず咽び入りぬ。

其四

実げにも頼まれぬ世の果敢はかなき、時運は禁きんえき腋をも犯し宿業は玉体にも添そひたてまつること、まことに免れぬことわり道理とは申せ、九

重の雲深く金殿玉楼の中にかしづかれおはしませし御身の、いっば一
 坏いの土あさましく頑ぐわん石せき叢さう棘きよくの下もとに神隠れさせ玉ひて、飛ひ
てうね鳥音を遺し麋鹿痕を印する他には誰一人問ひまゐらすものもな
 き、かゝる辺土の山やま間あひに物さびしく眠らせらるゝ御いたはしき。
 ありし往時そのかみ、玉の御座みくらに大政おほまつりごと おごそかにきこしめさせ玉ひ
 し頃は、三公九卿首けかうべを俛たれ百官諸司袂をつらねて恐れかしこみ、
きうぜん弓箭つはものの武夫伎能の士、あらそつて君がため心を傾ぶけ操を励
 まし、幸に慈愍じみんの御まなじりにもかゝり聊か勸賞の御言葉にもあ
 づからむには、火をも踏み水にも没いり、生命を塵ちん芥かいよりも軽く
 捨てむと競ひあへりしも、今かくなり玉ひては皆対岸いしうの人異舟の
かく客となりて、半卷の経を誦し一句の偈げをすゝめたてまつる者だに

なし。世情は常に眼前ぢやくに着して走り天理は多く背後あはに見はれ来るものなれば、千鐘の祿も仙化せんげの後には匹夫の情をだに致さする能はず、狗馬くばたちまちに恩を忘るゝとも固もとより憎むに足らず、三春の花も凋落の夕には芬芳ふんぼうの香り早く失せて、たる大日輪は虬ろ蟻うぎの穴にも光を惜まず、美女おもとの面にも熱を減ぜず、茫だいごたる大劫運ふうんは茅茨ぼうしの屋よりも笑声を奪はず、天子眼中にも紅涙おくを餽る、尽大地じんだいちの苦、尽大地の楽、没際涯ぼつさいがいの劫風滾ごふふう 《こんく》
 たり、何とりいでゝ歎き啣たむ。さはさりながら現土には無上の尊き御身をもて、よしなき事をおぼしたゝれし一念の御迷ひより、幾千いくその罪業つみを作り玉ひし上、浪煙る海原越えて浜千鳥あとは都へ通へども、身は松山に音をのみぞなくく孤灯に夜雨を聴き寒かんき

衾ん旧時を夢みつゝ、遂に空くなり玉ひし御事、あまりと申せば

御おん傷いたはしく、後の世のほども推し奉るにいと恐ろし。いざや

終よもすがら夜み供養したてまつらむと、御墓より少し引きさがりたると

ころの平ひらめなる石の上に端たんねん然と坐をしめて、いと静かにぞ誦し

いだす。妙法蓮華經提婆達多品 第十二。爾時にじぶつかうしよぼさつきふ仏告諸菩薩及

天人四衆、吾於過去無量劫中、求法華經無有懈倦、於多

劫中常作國王、発願求於無上菩提、心不退転、為欲滿

足六波羅密、勤行布施、心無悋惜、象馬七珍国城妻

子奴婢僕従、頭目身肉手足不惜軀命、……

日は全く没りしほどに山深き夜のさま常ならず、天かくすまで

茂れる森の間に微なる風の渡ればや、樹端こずえの小枝音さえだもせず動きて、

黒きが中に見え隠れする星の折ふしきら／＼と鋭き光りを落すの
 みにて、月はいまだ出でず。ふけ行くまゝに霜冴えて石床せきしやうい
 よく／＼冷やかに、万籟ばんらい死して落葉さへ動かねば、自然おのづと神清しんすみ
たましひ魂魄も氷るが如き心地して何とはなしに物凄まじく、尚御経を
 細と誦しつゞくるに、声はあやなき闇に迷ひて消ゆるが如く存あ
 るが如く、空にかくれてまたふたゝび空より幽に出で来るごとき
 を、吾が声とも他ひとの声ともおぼつかなく聴きつゝ、濁劫ぢよくごふあく悪世せち
ゆう中、多有たうしよきようふ諸恐怖、悪鬼入其身あくきにふごしん、罵詈毀辱我ばりきじよくが、と今いましも勸くわん
ぢぼん持品の偈げを称ふる時、夢にもあらず我が声の響きにもあらず、
 正しく円位と呼ぶ声あり。

其五

西行かすかに眼まなこを転じて、声する方の闇うかゞを覗へば、ぬば玉の黒
きが中を朽木のやうなる光り有てる霧とも雲とも分かざるもの
灰白く立ちまよへる上に、其様さまごと異なる人の丈いと高く瘦せ衰へて
凄まじく骨立ちたるが、此方に向ひて蕭せうぜん然たゞずと佇めり。素より生
死の際に工夫修行をつみたる僧なれば恐ろしとも見ず、円位と呼
ばれしは抑そも何人にておはすや、と尋ぬれば、嬉しくも詣で来つる
ものよ、我を誰とは尋ねずもあれ、末葉吹く嵐の風のはげしさに
園生の竹の露こぼれける露の身ぞ、よく訪とひつるよ、と聞え玉ふ。
あら情無や勿体なしや、さては院の御霊みたまの猶此土どをば捨てさせ玉

はで、妄執の闇に漂泊さすらひあくがれ、こゝにあらはれ玉ひし歟、あら悲しや、と地に伏して西行涙をとゞめあへず。

さりとはいかに迷はせ玉ふや、濁穢ちよくゑの世をば厭ひ捨て玉ひつることの尊くも有難くおぼえて、いさゝか随縁ずゐえんほふせ法施したてまつりしに、六慾の巷にふたゝび現げんぎやう形し玉ふは、いとかしこくも口惜き御心に侍り、仮現けげんの此界さかひにてこそ聖慮安らけからぬ節もおはしつれ、不堅ふけん如聚沫の御身を地水火風にかへし玉ひつる上は、旋転せんでん如車輪によしやりんの御心にも和合動転を貪り玉はで、隔生かくしやうそ即忘くまう、焚塵ふんちん即淨そくじやう、無垢の本土に返らせ玉はむこそ願はまほしけれ、頓やがては迂僧も肉壞骨散にくゑこつさんの暁を期し、弘誓ぐぜいの仏願を頼りて彼岸にわたりつき、楽しく御傍に参りつかふまつるべし、迷は

せ玉ふな迷はせ玉ふな、唯何事も夢まぼろし、世に時めきて栄ゆるも虚空に躍る水珠の、日光により七彩を暫く放つに異ならず、身を狭められ悶ゆるも闇夜を辿る稚児をさなごの、樹影を認めて百鬼来たりと急に叫ぶが如くなれば、得意も非なり失意も非なり、歡ぶさへも空なれば如何で何事まごころの實在ならんとぞ承はりおよぶ、無むこうを有んしんさう冤親想、永脱えいだつしよあくしゆ諸悪趣、所詮は御心を刹那にひるがへして、常生じやうしやうてきえつしん適悦心、受樂じゆらくむきゆうきよく無窮極、法味を永遠に樂ませ玉へ、と思入つて諫めたてまつれば、院の御靈は雲間に響く御声してからくと異様ことやうに笑はせ玉ひ、おろかや解脱げだつの法を説くとも、仏も今は朕わが敵あだなり、涅槃ねはんも無漏むろも肯うけがはじ、往時むかしは人朕ひかりが光明ひかりを奪ひて、朕われを泥犁ないりの闇に陥しぬ、今は朕人を涙に沈ましめて、朕が

あざわらひ
冷笑

の一声の響の下に葬らんとす、おもひ観よ汝、漸く見ゆる世の乱は誰が為すこととぞ汝はおもふ、沢の螢は天に舞ひ、闇裏みおもひの念は世に燃ゆるぞよ、朕は闇に動きて闇に行ひ、闇に笑つて闇やすらに憩ふ下津岩根の常闇とこやみの国の大王おほぎみなり、正法しやうぼうの水有らん限は魔道の波もいつか絶ゆべき、仏に五百の弟子あらば朕われにも六天八部の属あり、三世の諸仏菩薩ともがらの輩、何の力か世にあるべき、たゞ徒に人の舌より人の耳へと飛び移り、またいたづらに耳より舌へと現はれ出で、遊行するのみ、朕が眷属の闇きより闇きに伝ひ行く悪鬼は、人の肺腑に潜み入り、人の心しんかんこつずゐ肝骨髓くに咬くひ入つて絶えず血にぞ飽く、視よ見よ魔界の通力もて毒火を彼が胸に煽り、紅炎ぐえんを此これが眼より迸はしらせ、弱きには怨恨うらみを抱かしの強きに

は暎いかりを発おこさしめ、やがて東に西に黒雲狂ひ立つ世とならしめて、
 北に南に真鉄まがねの光の煌きらめき交ちがふ時を来し、憎しとおもふ人に朕
 が辛かりしほどを見するまで、朝家に酷むごく崇たをなして天が下をば
 掻き乱さむ、と御勢ひ凜しく誥つげたまふにぞ、西行あまりの御
 あさましさに、滝と流るゝ熱き涙をきつと抑へて、恐る惶おそるいさゝ
 か首かうべを擡もたげゝる。

其六

こは口惜まじくも正なきことを承はるものかな、御言葉もどか
 恐れ多けれど、方外の身なれば憚り無く申し聞えんも聊か罪浅う

思し召されつべくやと、遮つて存じ寄りのほどを言しまを試み申すべ
 し、御憤はまことにさる事ながら、若人いか瞋り打たずんば何を以て
 か忍辱にんにくを修めんとも承はり伝へぬ、畏れながら、ながらへて終
 に住むべき都も無ければ憂き折節に遇ひたまひたるを、よのなか世中そ
 むかせたまふ御便宜おんたよりとして、いよ／＼法海の深みへたにがは溪河の浅
 きに騒ぐ御心を注がせたまひ、彼岸の遠きへ此土どの汀去りかぬる
 御迷を船出せさせ玉ひて、玉をつらぬる樹この下に花降り敷かむ時
 に逢はむを待ちおはす由承はりし頃は、寂じやくねん然、俊成としなりなどと
 も御志の有り難さを申し交して如何ばかりか欣ばしく存じまら
 せしに、御納なふきやう経の御望み叶はせられざりしより、竹の梢に中
 つて流るゝ金弾その如くに御志あらぬ方へと走り玉ひ、鳴門の潮の

逆風さかかぜに怒つて天あまに滔はびこるやう凄じき御祈願立てさせ玉ひしと灰に
 伝へ承はり侍りしが、糞ねがはくは其事いっはりの虚妄いつはりにてあれかしと日ひ比ひ念ごころ
 じまゐらせし甲斐も無う、さては真まに猶なほ此こゝ袈しや婆ば界かいに妄執まがをとゞ
 め、彼かの兜と卒そつ天てんに浄楽じやうらくは得えず御坐おはしますや、訝いぶかしくも御意みごころの然さば
 かり何なにに留とどまるらん、月つきすめば谷やにぞ雲くもは沈しづむめる、嶺たかね吹き払はらふ
 風に敷敷かれてたゞ御頭ごづゑの転まじたまふを限かぎに弾指たんし転てんの相あひは、ま
 ことは戲論げろんの名目ななめのみ、真如まにょの法海ほふかいより一瓢いつべつの量りやうを分わち取りて、
 我執わしやくの寒風かんぷうに吹き結むすばせし氷こほりを我われぞと着きすれば、熱湯ねつとうは即仇すなはたる
 べく、実相じつさうの金こん山さんより半はん畚ぼんの資すけを齎たり来きりて、愛慾あいよくの毒火どくかに
 鑄い成なせし鼠ねずを己おのなりと思おもはんには、猫像めうざう或あるは敵かたきたるべけれど、
 本来ほんらい氷こほりも湯ゆも隔へだなき水みづ、鼠ねずも猫ねこも異ちがならぬ金かねなる時ときんば、仮相かりあひの

互に亡び妄現の共に滅するをも待たずして、たうたいそくくう 当体即空、たうじ 当
そくりやう 事即了、くわくねん 廓然として、天に際涯はて無く、峯の木枯、海の音、
 川遠白く山青し、何をか瞋いかり何にか迷はせたまふ、疾とく、疾く、
 曲路じやごふの邪業を捨て正道の苦心を発し玉へ、と我知らず地を撃つ
 て諫め奉れば、院のみたまの御亡靈は、山さんかく壑もたぢろき木石も震ふまで
すさまじに凄くも打笑はせ玉ひて、おろかなり円位、仏が好ましきものに
 もあらばこそ、魔か厭はしきものにもあらばこそ、安樂も望むに
 足らず、苦患くげんも避くるに足らず、何を憚りてか自ら意こころを抑おもひへ情を
 屈めん、妄執と笑はば笑へ、妄執を生命として朕われは活き、煩惱と
 云はば云へ、煩惱を筋骨として朕は立つ、おろかや汝しぐせいぐわ、四弘誓
ん願は菩薩の妄執、五時説教は仏陀の煩惱、法蔵が妄執四十八願、

観音が煩惱三十三身じん、三世十方恒河沙数の諸仏菩薩に妄執煩惱
 無きものやある、妄執煩惱無きものやある、何ぞ瞿曇ぐどんが舌した長ながな
 る四十余年の託言かごとくりごと繰言くりごと、我尊じようごまんごの冗語じようごまんご漫語、我をば瞞あざむき果おほす
 に足らんや、恨みは恨み、讐あだは讐あだ、復かへさでは我あるべきか、今は
 一切世間の法、まつた一切世間の相、森羅万象人畜草木しんらばんしやうにんちくさうもく、
 悉しつ皆かい朕わがの敵あだなれば打うち壊くづさでは已むまじきぞ、心に染まぬ大千
 世界、見よく、火前の片羽となり風裏の織せん塵ちんと為して呉うれむ、
 仏に六種の神通あれば朕に千般の業通あり、ありとあらゆる有うじや
 情うがんしき含識皆朕が魔界に引き入れて朕が眷属となし果つべし、汝
 が述べたるところの如きは円顛の愚物が常套の談、醜うしし、醜うしし、
 將もち歸り去れ、山に映りあひ、天地忽ち紅くれ色なみになるかと思

間に失せ玉ひぬ。

西行はつと我に復りて、思へば夢か、夢にはあらず。おのれは猶かつ提婆品だいばほんを繰りかへしく読み居たるか、其読続き我が口頭に今も途絶えず上り来れり。

(明治二十五年五月「国会」)

彼一日

其一

頼み難きは我が心なり、事あれば忽に移り、事無きもまた動か

んとす。生じ易きは魔の縁なり、念おもほしいまを放はなにすれば直おこに発はり、念を正ただしうするも猶なほ起たらんとす。此故ゆゑに心は大海の浪なみと揺ゆぎて定さだまる時無く、縁は荒野の草と萌もえて尽つくる期ごあらねば、たまたまたく大勇猛の意氣を鼓たして不退たひ転てんの果報を得んとするものも、今日の縁にひかれて旧年の心を失うふ輩あたらは、可惜あたら舟ふねを出だして彼岸ひがしに到いたり得えず、憂うれくも道みちに迷まひて穢あどど土どに復かへ還かへるに至いたる。されば心を収おさむるは靈地に身をみの靈地れいに運こびて寺てらの御おん仏ぶつをも拜まみ奉ほうり、勝しょう縁えんを結むすびて魔縁まを斥おけ、仏事に勤こめて俗事に遠とほざからんかた賢けんかるべしとて、そこに一日いちにち、かしこに二日ふたにちと、此御この仏ぶつ彼御かの仏ぶつの別わかちも無くそれそれの御堂おんを拜まみ巡めぐりては、或あるは祈願きを籠かごめて参籠さんの誠まことを致いたし、或あるは和歌を奉ほうりて讚歎さんの意いを表あらわし来きりけるが、仏天ぶつの御思おん召めい

にも協ひけん聊か冥加も有りとおぼしく、幸に道心のほかのあだし他
ごころ心も起さず勝縁を妨ぐる魔縁にも遇はで、終に今日に及ぶを得
 たり。既往の誠に欣ぶべきに将来の猶頼まゝほしく、長谷の御寺
 の觀世音菩薩の御前に今宵は心ゆくほどほふせ法施をも奉らんと立出で
 たるが、夜に霜は募りて樹に紅は増すかなづき神無月の空のやゝ寒
 く、夕日力無くうすつ春きて、おく晩れし百舌の声のみ残る、暮方のあはれ
 さの身に浸むことかな。見れば路の辺の草のいろく、其とも分
 かず皆いづれも同じやうに枯れ果てゝくづほ崩折れふ偃せり。珍らしから
 ぬ冬野のさま、取り出でゝ云ふべくはあらねども、折からの我が
おもひ懐に合ふところあり。ごころ情を結びことば詞を束ねて、歌とも成らば成して
 見ん、おゝそれよ、さま／＼に花咲きたりと見し野辺のおなじ

色にも霜がれにけり。嗚呼我人とも終には如是かく、男女美醜わかちの別も
 無く同じ色にと霜枯れんに、何の翡翠さまの髪かみの状さま、花の笑わらひの顔かほか
 有らん。まして夢を彩る五欲たのしみの歡樂たのしみ、幻を織る四季あそびの遊あそび、い
 づれか虚いつはり妄いつはりならざらん。たゞ勤むべきは菩提の道、南無仏、南
 無仏、と觀じ捨て、西行独り路を急ぎぬ。

其二

弓張月の漸う光りて、入相いりあひの鐘かねの音も収まる頃、西行は長谷はせ
 寺でらに着つきけるが、問とひ驚おどかさすべき法のりの友の無なきにはあらねど問とひ
 も寄よらで、觀音堂くわんおんどうに参り上りぬ。さなきだに梢透なほきたる樹きをなぶ

りて夜の嵐の誘へば、はらくくと散る紅葉なんどの空に狂ひて吹
 き入れられつ、法衣ころもの袖にかゝるもあはれに、又仏前の御灯明みあかしの
 目瞬めはじきしつゝ万般よろづのもの黒み渡れるが中に、いと幽なる光を放
 つも趣きあり。法華經の品第ほん第二十五を声低う誦するに、何となく
 平時つねよりは心も締まりて身に浸みわたる思ひの為れば、猶誠を籠
 めて誦し行くに天も静けく地も静けく、人も全く静まりたる、時
 といひ、処といひ相応して、我耳に入るは我声ながら、若くは随
 喜仏法の鬼神なんどの、声を和あはせて共に誦する歟かと疑はるゝまで、
 上無く殊勝に聞こえわたりぬ。特に参ことりたる甲斐はありけり、菩
 薩も定めしかゝる折のかゝる所作しよさをば善哉よしとして必ず納受なふじゆし玉
 ふなるべし、今宵の心の澄み切りたる此すの清しさを何に比へん、

あまりに有り難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら此御堂の片隅になりふざ跣坐ふざなして、あかつき暁天がたに猶一度誦經しまゐらせて、扱其後香華をも浄水をも供じて罷らめと、西行やがて三拝して御仏の御前を少しすき退り、影暗き一隅に身を振ぢ据ゑ、凍れる水か枯れし木の、動きもせねば音も立てず、じやくねん寂然として坐し居たり。

夜は沈と漸く更けて、風も睡れる如くになりぬ。右左に並びて立ちたりける御灯明は一つ消え、また一つ消えぬ。今はたゞいと高き吊灯笼の、光り朦朧として力無きが、夢の如くに残れるのみ。此寺こゝの僧どもは寒氣さむさに怯ぢて所化寮しよけうに炬をや囲みてあるらん、影だに終に見するもの無し。云ふべきかたも無く静なれば、ひごろ日比焼きたる余氣なるべし今薰ゆるとにはあらぬ香の、有るか無

きかに自然おのづから として霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや頭かしらには何やらん打被うちかつぎたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むるとにはあらざれど、何としも無く猶見であるに、やがて月の及ばぬ闇の方に身を入れたれば定かには知れぬながら、此御堂に打向むかひて一度は先まづ拝み奉り、さて静 と上り来りぬ。御堂は狭からぬに灯ひは螢ほどなり、灯の高さは高し、互の程は隔たりたり、此方を彼方は有りとも知らず、彼方を此方は能くも見得ねば、西行は只我と同じき心の人も亦有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。

彼方は固より闇の中に人あることを知らざれば、何に心を置くべくも無く、御仏の前に進み出でつ、最いぢ謹しましげに危かしこまりて、

数あまた度び合掌がつしやうらいはい礼拝らいはいなし、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の

道の友なり、其心こゝろ操ばへの浅間ならぬも夜深の参詣に測り得たり。

衣の色さへわか弁かち得ざれば面おもては況して見るべくも無けれど、浄土の

同行の人なるものを、呼びかけて語らばや、名も問はばやと西行

は胸に思ひけるが、卒爾ものいに言はんは悪あしかるべし、祈願の終つて後

にこそと心を控へて伺ふに、彼方は珠数を取り出して、さや／＼

とばかり擦り初そめたり。針の落つる音も聞くべきまで物静かなる

夜の御堂の真中に在りて、水すゐ精しやうの珠数を擦る音の亮さやかなる響

きいと冴えて神し。御経は心に誦するとおぼしく、万ばん籟らい絶え

たるに珠の音のみをたゞ緩やかに緩やかに響かす。其声或は明ら

かに或は幽に、或は高く或は低く、寤覚の枕の半は夢に霰の音を

聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面おもに 中に万法あり、皆与実相不
 相違背さうゐはいと、いとをかしくも聞きなされるれば、西行感に入つて在
 りけるが、期したるほどの事は仕果て、や其人数珠を収めて御仏
 をば礼拝すること 数あまたゝび度しつ、やをら身を起して退まからんとす。
 菩提の善友、浄土の同行、契を此土に結ばんには今こそ言葉をか
 くべけれど、思ひ入て擦る数珠ずゞの音の声すみておぼえずたまる我
 涙かな、と歌の調は好かれ悪かれ、西行急にはかに読みかくれば、彼方
 は初めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、何と仰られしぞ、
 今一度と、心を圧鎮おしづめて問ひ返す。聞き兼ねけんすゐと猜するまゝ、
 思ひ入りて擦る数珠の音の声澄みて、と復ふたゝび言へば後は言はせず、
 君にて御坐せしよ、こはいかに、と涙なんだに顫ふるふおろく声、言葉の

文もしどろもどろに、身を投げ伏して取りつきたるは、声音に紛ふかたも無き其そのかみ昔偕老同穴の契り深かりし我が妻なり。厭いて別れし仲ならず、子まで生なしたる語らひなれば、流石男も心動くに、況して女は胸逼りて、語らんとするに言葉を知らず、巖いはに依りたる幽蘭の媚なまめかねども離れ難く、たゞ露けくぞ見えたりける。

西行きつと心を張り、徐しづかに女の手を払ひて、御仏の御前に乱らうがはしや、これは世を捨てたる瘦法師なり、捉へて何をか歎き玉ふ、心を安らかにして語り玉へ、昔は昔、今は今、繰言な露宣ひそ、何事も御仏を頼み玉へ、心留むべき世も侍らず、と諭せば女は涙にて、さては猶我を世に立交らひて月日経るものと思したまふや、灯火暗うはあれどおほよそは姿形をも猜すし玉へ、君の保延に家を

出で、道に入り玉ひしより、宵の鐘曉の鳥も聞くに悲く、春の花
 秋の月も眺むるに懶くて、片親無き児の智慧敏きを見るにつけ胸
 を痛め心を傷ましめしが、所詮は甲斐無き嗟歎なげきせんより今生は擱さしお
 き後世をこそ助からめと、娘を九条の叔母に頼みて君の御跡を追
 ひまゐらせ、同じ御仏の道に入り、高野の麓の天野といふに日比ひごろ
 行ひ居り侍るなり、扱も君を放ち遣りまゐらせて御心のまゝに家
 を出づるを得さしめ奉りし往時そのかみより、我が子を人に預けて世を捨
 てたる今に至るまで、いづれか世の常としては悲しきことの限り
 ならざらん、別れまゐらせし歳は我が齡、僅に二十歳はたちを越えつる
 のみ、また幼いとけなき児を離せしときは其そが六歳むつつと申す愛度無き折な
 り、老いて夫を先立つるにも泣きて泣き足る例ためしは聞かず、物言は

ぬみづこ嬰兒を失ひても心狂ふは母の情、それを行末長き齡に、君とは故も無くて別れまゐらせ、可愛き盛りにをさなき幼児を見棄てつる悲しさは如何ばかりと覺す、されど斯ばかりの悲しさをも、女の胸に堪へ堪へて鬼女蛇神のやうに過ぎ来つるは、我が悲みを悲とせで偏に君がよろこび歡喜を我が歡喜とすればなるを、別れまゐらせしより十余年の今になりて繰言も云ふものやう思はれまゐらせたる拙さ情無さ、君は我がための知識となり玉ひぬれば、恨み侍らざるばかりか却て悦びこそ仕奉れ、彼世にてもあれ君に遇ひまゐらせなば君の家を出で玉ひし後の我が上をも語りまゐらせて、能くぞ浮世を思ひ切りぬるとの御言葉をも得んとこそ日比は思ひ設け居たれ、別れたてまつりし時は今生に御言葉を玉はらんことも復有る

まじと思ひたりしに、夢路にも似たる今宵の逢瀬、幾年いくとせの心あつかひも聊か本意ほんいある心地して嬉しくこそ、と細こまく《こま》と述ぶ。折から灯籠の中の灯ひの、香油は今や尽きに尽きて、やがて熄きゆべき一明り、ぱつと光を発すれば、臙気ながら互に見る雑ざい彩さい無むききぶつえつにつ裏つまれてせうぜん蕭然として坐せる姿、修行に寡やれつ老いたる面ざし、有りし花やかさは影も無し。

これが徃むかし時の、妻か、夫か、心根可愛や、懐かしやと、我を忘れて近寄る時、忽然たちまちふつと灯は滅して一念未み生しやうの元の闇に還れば、西行坐を正ただうして、能くこそ思ひ切り玉ひたれ、入道の縁は無量にして順じゆんぎやくしやう逆ぎやく正ただ傍ばうのいろくあれど、たゞ徃生を遂ぐるを尊ぶ、徃むかし時は世間の契を籠め今は出世間の交りを結ぶ、御

身は我がための菩提の善友、浄土の同行なり悦ばしや、たゞし然さまでに浮世をば思ひ切りたる身としては、懐旧の情はさることながら余りに涙の遣る瀬無くて、我を恨むかとも見えし故、先刻さきのやうには云ひつるなり、既に世の塵に立交らで法の門かどに足踏しぬる上は、然ばかり心を悩ますべき事も実まことは無き筈ならずや、と最いと物優しく尋ね問ふ。

慰められては又更に涙脆きも女の習ひ、御疑ひ誠に其理由ゆゑあり、もとより御恨めしう思ひまゐらす節もなし、御懐しうは覚え侍れど、それに然さばかりは泣くべくも無し、御声を聞きまゐらすと齊しく、胸に湛へに湛へし涙の一時に迸り出でしがため御疑を得たりしなり、其所以いはれは他ならぬ娘の上、深く御仏の教に達して

宿命しゆくみやう業報を知るほどならば、是も亦煩ひとするに足らずと悟りてもあるべけれど然は成らで、ほとく頭の髪かみの燃え胸の血の凍るやうに明暮悩むを、君は心強くましますとも何と聞き玉ふらん、聞き玉へ、娘は九条の叔母が許もとに、養ひ娘といふことにて叔母の望むまゝに与へしが、叔母には真まことの娘もあり、母の口よりは如何なれど年齢こそ互に同じほどなれ、眉みめ目容姿かたちより手書き文読む事に至るまで、甚いたく我が娘は叔母の娘に勝りたれば、叔母も日頃は養ひ娘の賢いとき可愛いとさと、生うみの女の自然むすめおのづからなる可愛いとさとに孰いとれ優り劣り無く育てけるが、今年ことしは二人ともに十六になりぬ、髪かみの艶つや肌の光り、人のなの、纔さうに一人の子を持ちて人となるまで育ててもせず、児童こどもの間なかの遊びにも片親無きは肩かた窄すぼる其の憂うれき思しを四歳よっよ

り為せ、六歳むつといふには継ましき親を頭に戴く悲みを為せ、雲の蒸す夏、雪の散る冬、暑さも寒さも問ひ尋ねず、山に花ある春の曙、月に興ある秋の夜も、世にある人の姫等たちの笑み樂しむには似もつかず、味気無う日を送らせぬる其さへ既に情無く親甲斐の無きことなれば、同じほどなる年頃の他家よその姫などを見るにつけ、嗚呼我が子と思ひ出で、木の片、竹の端くれと成り極めたる尼の身の我が身の上は露思はねど、かゝる父を持ち母を持ちたる吾が子の果報の拙さを可哀あはれと思はぬことも無し、況して此頃の噂を聞き又余所ながら視もすれば、心に春の風渡りて若木の花の笑まんとする恋の山路に悩める娘の、女の身には生命なる生くる死ぬるの岐れにも差し掛りたる態なる上、生みの子の愛に迷ひ入りた

る頑かたくな凶なの老婆ばばに責められて朝夕を経る胸の中、父上御坐おはさば母
 在らばと、親を慕ひて血を絞る涙に暮るゝ時もある体てい、親の心の
 迷はずてやは、打捨て置かば女は必ず彼方此方の悲さに身を淵河
 にも沈めやせん、然無くも逼る憂さ辛さに終には病みて倒れやせ
 ん、御仏の道に入りたれば名の上えにしの縁は絶えたれど、血の聯つらなり続
 は絶えぬ間なか、親なり、子なり、脈絡すぢは牽ひく、忘るゝ暇もあらばこ
 そ、昼は心を澄まして御仏に事つかへまつれど、夜の夢は女むすめのことな
 らぬ折も無し、若し其儘さしおに擱おいて哀しき終を余所　しく見ねば
 ならずと定まらば、仏に仕ふる自みづから分ぶんは禽にも獸にも慚しや、た
 とへば来ん世には金こがねの光を身より放つとも嬉しからじ、思へば御
 仏に事ふるは本は身を助からんの心のみにて、子にも妻にもいと

酷き鬼のやうなることなりけり、
爽いさぎよき快よきには似たれども自己おのれ一

人を蓮はちすば葉ばの清きに置かん其為に、人の憂きめに眼も遣らず人の

辛きに耳も仮さず、世を捨てたればと一口に、此世の人のさま／

＼を、何ともならばなれがしに斥け捨つるは卑しきやうなり、

何とて尼にはなりたりけん、如何にもして女と共に経るべかりし

に、鈍おそくも自ら過ちけるよ、今は後世ごせ安樂も左のみ望まじ、火

と慕ひ寄りつゝ、縋りまゐらせたるを御心強くも、椽より下へと

荒らかに 《こま／＼》と語れば西行も数あまた／＼度眼を押しぬぐひ

しが、声を和らげていと静に、云ひたまふところ皆其理あり、たゞ

し女の上の事は未だ知らずに御在おはすと見えたり、此の五日ほど前の

事なり、我みづから女を説き諭して、既に火宅くわたくの門を出で、法

苑の内に入らしめ終んぬ、聊か聞くところありしかば、眼前の
 に祈りて酬ひまゐらせん、又情ある人のたゞ一人侍りしが、何と
 申し交したることも無ければ別れくくなるとも怪しうはあらず、
 雲は旧もとに依つて白く山は旧に依つて青からんのみなり、全く世を
 ば思ひ切り侍りぬ、とく導師となりて剃度せしめ玉へと、雄し
 くも云ひ出でたれば、其心根の麗せきに愛で、我また雄しく
 も丈なる烏羽玉うばたまの髪を落して色ある衣きぬを脱ぎ棄てさせ、四弘誓しくせいぐわ
 願んを唱へしめぬ、や、何と仕玉へる、泣き玉ふか、涙を流し玉
 ふか、無理ならず、菩提の善友よ、泣き玉ふ歟、嬉しさにこそ泣
 き玉ふならめ、浄土の同行よ、落涙あるか、定めし感涙にこそ御
 坐すらめ、おゝ、余りの有難おのれさに自分もまた涙聊か誘はれぬ、さ

て美しき姫は亡せ果てたり、美しき尼君は生なり出で玉ひぬ、青
としたる寒げの頭かしら、鼠色ねずみの法衣ころも、小き数珠ずだ、殊勝なること申すば
かり無し、高野の別所に在る由の菩提の友を訪とぶらはんとて飄然とし
て立出で玉ひぬ、其後の事は知るよし無し、燕せはの忙せはしく飛ぶ、兔
の自ら剥ぐ、親は皆自ら苦む習なれば子を思はざる人のあらんや、
但し欲樂の満足を与へ榮華の十分を享けしむるは、木葉このはを与へて
児の啼きを賺すかす其にも増して愚のことなり、世を捨つる人がま
ことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ、たゞ幾重にも御
仏を頼み玉へ、心留むべき世も侍らず、南無仏、と云ひ切
りて口を結びて復言はず。月はやがて没いるべく西に廻りて、御堂
に射し入る其光り水かとはかり冷かに、端然として合掌せる二人

の姿を浮ぶが如くに御堂の闇の中に照し出しぬ。

(明治三十四年一月「文芸倶楽部」)

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集 6 幸田露伴集」講談社

1963（昭和38）年1月19日初版第1刷

1980（昭和55）年5月26日増補改訂版第1刷

初出：「國會」

1892（明治25）年5月

「文藝俱樂部」

1901（明治34）年1月

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字、旧仮名にあらためま

した。

※「御陵《みさゝぎ》」と「御陵《みさゝき》」の混在は底本通りにしました。

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2008年3月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二日物語

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>